

福島県の中・長期の心の支援計画 について

福島県立医科大学医学部神経精神医学講座

丹羽 真一

精神科医療システムにおきた障害の 状況

ひまわりの家3(就労支援B型)

- ・ひまわりの家(就労支援B型)
- ・3月下旬再開 フラット
- ・グループホーム7か所(ひまわりの家)

- 4月縮小再開あさがお(就労支援B型)
- 6月縮小再開ほっと悠(就労支援B型)
- 休業グループホーム3か所(雲雀ヶ丘病院、小高赤坂病院)
- 4月再開グループホーム・ケアホーム3ヶ所(あさがお)

他地域で再開検討中コーヒータイム(就労B型)

休止中あおば共同作業所(就労支援B型)

いわきへ移転再開 結いの里
相談支援事業所、グループホーム)

雲雀ヶ丘病院
6月下旬～
外来週2日のみ

小高赤坂病院
休診

双葉厚生病院
休診

双葉病院
休診

高野病院
縮小営業中

警戒区域



2011.8.1現在

米倉一磨氏作成

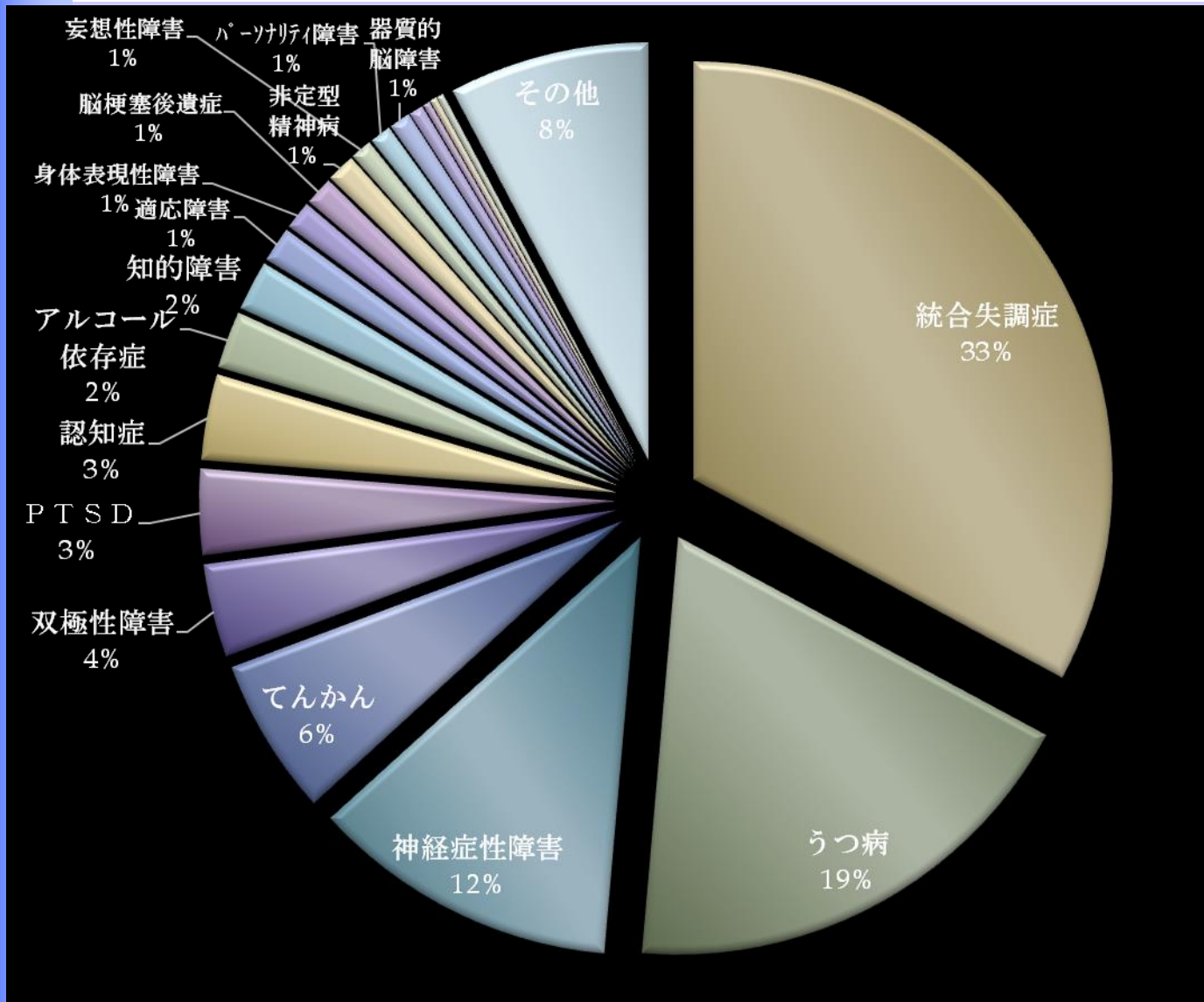
福島医大・心のケアチーム

公立相馬病院精神科臨時外来

外来受診者数（平成23年3月29日～6月末）

◆	外来開設日数	65日
◆	受診者延数	851名
◆	1回平均受診者数	13.1名

公立相馬病院精神科臨時外来 診断の内訳



統合失調症	119
うつ病	67
神経症性障害	43
てんかん	22
双極性障害	13
PTSD	12
認知症	12
アルコール依存症	8
知的障害	7
適応障害	5
身体表現性障害	4
脳梗塞後遺症	4
非定型精神病	4
妄想性障害	3
パーソナリティ障害	3
器質的脳障害	3
発達障害	2
自閉症	1
体感異常症	1
ADHD	1
その他	28
合計	362

相双に新しい精神科
医療・保健・福祉システムを
つくる会の事業

相馬の精神科医療拠点

年内開設へ構想説明

被災者の心のケアを目的に相馬市へ設置準備を進め

ている精神科医療拠点について、福島医大などでつくるグループ「相双に新しい精神科医療保険システムをつくる会」は6日、同市で

会合を開き、仮設住宅などへの巡回診療を行うほか、2〜3床の入院ベッドを備えた精神科クリニックと、看護師などによる戸別訪問などを行うケアセンターを

併設させる構想を説明した。同グループは、構想案に基づき年内の施設開設を目指す。

た。拠点施設の入院ベッドは2〜3床にとどまるものの、中通りの協力機関への搬送なども想定している。

拠点構想は、原発事故の影響などで相双地方の精神科医療の受け皿が大幅に縮小したことを受け、同大の丹羽真一教授らがまとめ

た。拠点施設の入院ベッドは2〜3床にとどまるものの、中通りの協力機関への搬送なども想定している。

会合では、当面必要な事業費約1億2千万円のほか、継続運営費の支援を国、県などの関係機関に求めることなどを確認した。



構想案を基に年内の施設開設を目指すことを確認した会議

仮設住宅へのアプローチ(新地町・相馬市・南相馬市)



- 「いつもここで一休みの会」
- 「サロン」
- 全戸訪問(11・3・7月)

「相双に新しい精神科医療保健福祉システムをつくる会」構想図

相馬市保健センターおよび
南相馬市原町保健センターでの活動

- 「ちょっとここで一休みの会」



職員の心の相談/健診:年1回

- 相馬広域消防署員
- 高校教員
- 新地ホーム
- 役所/役場職員



未受診者・治療中断者の治療導入への支援

- 相談
- 訪問

精神科医療保健福祉
関係者へのアプローチ

- 研修会
- 定期ミーティング
- DVD作成

精神科小規模
デイケア

訪問看護
(24時間対応)

入院ベッド(2~3床)
(危機介入・レスパイトケア)

巡回車の運行

訪問

搬送方法の確立

中通りの病院へ

福祉施設(地域活動支援センター/
グループホーム等)

自宅

心のケア

—その課題と方向性—

2011年(平成23年)8月10日

福島県の転校1.4万人

公立小中 全児童・生徒の1割

福島県内で公立の小中学校に通う約1万4千人の児童・生徒が、既に県内外に転校したか、夏休み中の転校を希望していることが同県教育委員会のまとめで分かった。全児童・生徒の1割近くにあたる。多くは「放射線への不安」を理由に挙げたという。

県教委によると、7月15日時点で県外に転校した児童・生徒が7672人、県内の転校が4575人いた。夏休み中に転校を希望して

いる児童・生徒は、県外が1081人、県内が755人だった。東京電力福島第一原発のある「浜通り」地域だけではなく、福島市や郡山市など「中通り」地域からの転校も多いという。

夏休み中の転校希望者に理由を聞いたところ、県外転校希望の約4分の3が「放射線への不安」と回答。県内転校希望の約半数は「仮設住宅への引っ越し」を理由にした。

県教委は「事故の収束が

見えず、転校を決めた家庭が少なくないのでは。保育

園や幼稚園児を含めると、子どもの県外流出は深刻な問題だ」としている。

被災者の心悲鳴

広がるうつ・アルコール依存 地域での支援必要

予防訴える専門家

被災地では、うつ・アルコール依存の予防への関心と知識を、津波長による、被災者が避難所高めても活動を続けている。から仮設住宅に移って、層、松下山生副院長は、うつ・アルコール依存の危険が高まっているという。「保健師が1ル依存の最も原因は孤独だと指摘する。地域のコミュニティ期間同じ人の話を聞きつけて、が残る被災地では、互いに支え合、体制が必要だが、被災地では保うことが支障につながる。周囲に気になる精神科専門院としての実績を、人がいたら早め受診を勧め、持つ東北会精神(仙台市)の石川しほと訴えている。

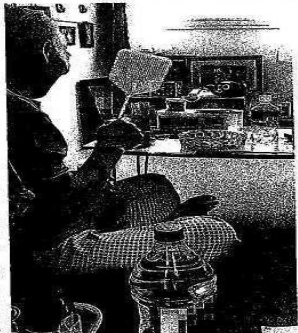
東日本震災の被害に、うつ・アルコール依存が広がっている。家族や家を失った被災者や先の見えない暮らしの不安、避難所や仮設住宅の生活でのストレスが原因だ。専門家は、「コミュニティや地域社会にもうつの必要性を訴えている」。

「生きているのがやだなあ」

家に戻れず悲観

「死んだ方がいいのか、近は効かなくなり、1時間も、生まれてからずっと、同じ町に住んでいた。一回は「生きているのが死にたい」。東京電 びやなまも(原)と、力福第一原から約5、宮城県気仙沼市の元甲板の緊急時避難準備区域にある福島県広野町が同県、わさ市のホテルに避難した女性86がうつを、5年前に夫を酒量増した。30年以上住んだ家に戻れる見込みはない。避難後、眠れなくなって睡眠薬を処方されているが、最

い」と呼ばれる夢を見る。恐ろしく眠れない」。男性は避難所でよく夜に叫ぶ。他の避難者から「い、加減にして」と言われると、



遺影や妻の写真を囲まされた仮設住宅で朝から焼酎を飲む男性。入院は「絶対嫌だ」という宮城大船渡市、岡崎です(画像は、部加して)は、妻の遺影や離れて暮らす子どもの写真が並ぶ。男性のそばには、2、2、2、2の焼酎の瓶が置かれていた。元と職、若いころから仕事が終わると飲んでいた。「酒やめたら、何が

「朝8時40分から」

仕事なく酒量増

アルコール依存症患者も目立ち始めている。7月中旬、久里浜アルコール症センター(神奈川県)の「心のクイズ」から飲み始めましたか」一週8時40分くらいか

福島県会若松市などの避難所を月まる巡回していた京都府の心のクイズ「ム」は、800人を診察した。このうち震災が原因とみられる反応性うつと診断された患者は51人(19.5%)だった。いわさ市の精神科・心療

住宅に住む一人暮らしの男性(78)を訪ねた。部屋に

楽しみなん、同子1人の真栄里仁、精神科院長によると、継続訪問している9人中、8人がアルコール依存問題を抱えているという。「朝から飲酒する人は入院が必要なんです。定期的に見守ることで、少しでも抑止力につながれば」と話。(青木美希、岡崎明子)

震災後、自殺者が急増 因果関係は不明 政府が情報収集に乗り出す

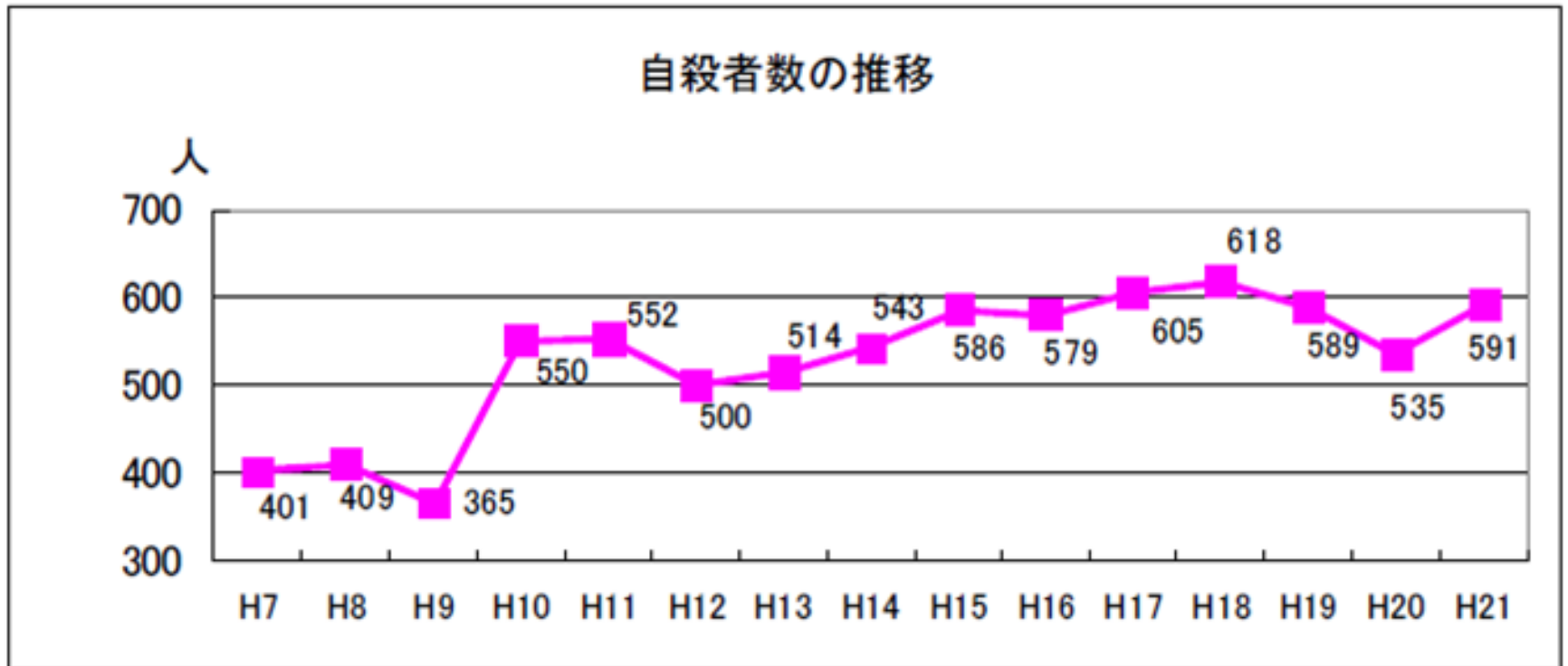
2011.7.16 00:15

自殺者が急増している。4～6月は3カ月連続で前年同月を大幅に上回った。津波で自宅を失い無理心中した高齢夫婦、放射能汚染で野菜の摂取制限が出された翌日に自殺した農家…。政府は対策に生かすため詳細な情報収集に乗り出した。

- 6月11日、福島県相馬市の酪農家の男性（55）が自殺しているのが見つかった。フィリピン人の妻と息子2人は福島第1原発事故の影響でフィリピンに帰っていた。「原発さえなければ…」。男性は堆肥小屋の壁にこう書き残していた。
- 飯舘村では4月中旬、102歳の男性が死亡しているのが見つかった。家族が村外に避難し、離れ離れで暮らしていたことを苦にした自殺とみられている。
- 6月下旬には「老人はあしでまといになる。お墓にひなんします」と遺書に記し、自殺した南相馬市の93歳の女性もいた。

警察庁のまとめでは、福島県内の自殺者数は4月以降、3カ月連続で前年同月を上回っている。特に5月は40%近い上昇率を示しており、震災の影響をうかがわせる数字といえる。

県内の自殺者推移



月あたり平均 46人

出典：人口動態統計（厚生労働省）

資料：福島県保健福祉部「保健統計の概況」

こころのケアの課題

- 1 精神疾患患者の治療の継続と維持
- 2 震災・原発事故のために新たに発生するPTSDやアルコール依存などへの早期介入
- 3 高齢者の認知機能低下の抑止
- 4 自殺の抑止
- 5 医療・福祉スタッフのメンタルケア力の向上

こどもの心のケア

厚生労働省

福島県災害対策本部

県知事

派遣要請

日本児童青年精神医学会・日本小児心身医学会派遣専門医

県臨床心理士会派遣臨床心理士

チームを構成:
下記地域で予約診療・相談

県障がい福祉課

県精神保健福祉センター
＜地域ニーズの全県調整＞

会津 診療・相談: 県立会津総合病院

会津 相談: 会津保健福祉事務所

県立医大
災害対策

＜心のケアチーム＞

中通り 診療・相談: 総合療育センター・県立矢吹病院・福島医大

＜こどもの心のケアチーム＞

【日本児童青年精神医学会】
【日本小児心身医学会】

【福島県精神医学会】
【福島県臨床心理士会】

【福島県児童家庭課・児童相談所】
【福島県養護教育センター】

【福島医大医学部】
小児科学講座
神経精神医学講座

【福島医大看護学部】
精神看護学領域
心理学教員

浜通り以外地域でのチーム編成
県内精神科医(精神科病院協会・診療所協会等)・臨床心理士会・PSW協会・看護協会

相双地域でのチーム編成
県外からの精神科医師
看護師・心理士・PSW等
医大: 精神科医
医大: 看護学部職員(精神)
相双保健福祉事務所保健師

いわき市でのチーム編成
医大: 精神科医
医大: 性差医療センター医師
+ 医大: 看護師・CP

浜通り以外

- # 専門医/臨床心理士ペアで予約診療
- # 保健所乳幼児健診で、児観察・母の相談
- # 避難所での親子を対象とした相談・診療
- # 放射能に関する適切な啓発活動
- # 小児科クリニックと児童相談所の連携

診療・相談: 公立相馬総合病院

相談: 相馬市保健センター

相双

診療・相談: 長橋病院

いわき市

相談: いわき市保健福祉センター

こころのケア — 効果的枠組み

- 1 医療、保健、福祉を総合して
- 2 地域のつながりを大切にして
- 3 生活の再建を基本にして

中・長期のこころのケアの課題

- 1 避難生活が長期化する避難者のこころの問題に対応
- 2 放射能汚染への不安から生じるこころの問題に対応
- 3 避難生活、放射能汚染対策から生まれるこどものこころの問題に対応

⇒ 県精神保健福祉センターのもと県内3地域に各々2チームで構成される「こころのケアセンター」を設置して、中・長期的ケアにあたる